■研究発表論文

「神戸南京町」の形成と神戸華僑の関わり方に関する研究

A Study on the relationship between the formation of “Kobe Chinatown” and Kobe overseas Chinese

末廣　拓登*　　伊藤　弘**

Takuto SUEHIRO　Hiromu ITO

Abstract: The purpose of this study is to understand the relationship between the residential area and “Kobe Chinatown” and surrounding areas of overseas Chinese in Kobe since the opening of Japan and the business area, and to clarify how to get involved with Kobe overseas Chinese that led to the current “Kobe Chinatown”. As for the living area of overseas Chinese in Kobe, we revealed the range of today's Kobe Chinatown area and the surrounding Chinese-related building use, the distribution of Chinese gates and temple, and the location environment from the residential map. In addition, from the literature, we revealed the Kobe Chinatown district and its surrounding areas related to overseas Chinese, and festivals and events related to Kobe overseas Chinese. The results of this study indicate that in Kobe, the residential area of overseas Chinese near the Chinese temple and Kobe Chinatown, which directs Chinese culture, have different aspects in buildings and events, and have a dual structure of Chinese culture. This is related to the history of the city of Kobe, and it can be said that it is a characteristic of Kobe city that aims to become an urban tourist site by using its image while accepting overseas Chinese as residents.

Keywords: *overseas Chinese, urban tourist site, architecture, event*
キーワード：華僑，都市観光地，建築物，イベント

１．序論

（１）研究背景と目的

兵庫県神戸市には，横浜中華街とならび日本を代表する中華街の「神戸南京町」がある。ここには，横浜中華街と同様，牌楼や中国様式の東屋が設置され，中国風の外観を持つ店舗が軒を連ねている。また，春節祭など中国にちなんだイベントが行われ，テーマパークのように中国風のイメージが濃厚な空間となっている。

しかし，戦前から神戸には華僑が居住していたにも関わらず，テーマパークのように中国風のイメージに基づく整備がなされたのは，後述するように日中国交回復（1972）以降である。また，「神戸南京町」には横浜中華街のように区域内に関帝廟や学校などがなく，その形成には横浜中華街とは異なる展開 [1]があったと考えられる。

中国人による特定のイメージに基づくまちづくりに関する研究としては，上海における旧租界地区の近代洋風建築イメージに即したまちづくりにかかる研究がある。例えば，外灘地区の近代洋風建築に注目し，再開発による景観破壊が起きていることを指摘した研究 [2]や，上海のかつてのイギリス人居留地の道路・街区・建築物の把握により，歴史的道路，歴史的街区，歴史的建造物が多く残されていることを明らかにした研究 [3]があり，こうした旧租界地の歴史的建築景観が観光地として一定の評価を受けていることを明らかにした研究 [4]がある。

中国本土以外における中国風のイメージを利用した街づくりの研究としては，アメリカのチャイナタウンにかかる研究がみられる。和田は，シアトルでは，中華門の建設やイベントの実施によって中国風のイメージを付与され，その実施には行政の援助を受けた NPO が関与しているとする。またワシントン DC では，中華門の建設，最寄り駅名の改定，景観ガイドラインの策定などによるチャイナタウンの再開発が進んでおり，姉妹都市である北京市の助成があったことを指摘している [5]。

一方，チャイナタウンを「中国人居住地」ととらえたものとしては，サンフランシスコを事例に，戦後の華人人口の増加に伴いチャイナタウンが周辺へ拡大する一方，オールドチャイナタウン居住者がより良好な居住条件である郊外へ移住するようになり，その結果，オールドチャイナタウンが居住地から観光地へと変化したことを指摘している [6]。このほか，ニューヨークやパリ，コルカタ，クアラルンプール，仁川といった町におけるチャイナタウンの変遷についても整理が試みられている [7]。

このように，シアトルやワシントン DC では，中国人集住地であるチャイナタウンでの中国イメージを利用したまちづくりが行われており，サンフランシスコでは，これまで「チャイナタウン」と呼ばれてきた地区から中国人が郊外へ移住した結果，「チャイナタウン」が居住地から観光地へと変化したことが指摘されている。

「神戸南京町」に関する研究は，今日の南京町の中国風のイメージの具体像を示した研究として，神戸南京町の建物から 12 項目の中国古代建築の構成要素を抽出し，これらの要素が繰り返し出現することにより中国都市イメージの景観を作り出していることを指摘した研究 [8] や，店舗の独自性から，「中華らしさ」が日常的な経営を通して構築されていることを指摘した研究 [9]がある [10]。南京町の形成過程を示した研究としては，戦前から現在までの南京町の歴史について，地区の利用方法に注目して変遷を明らかにした歴史研究 [11]や，戦前期において南京町と近隣の通りが神戸華僑の活動地であったことを指摘した研究 [12]があり，観光整備の変遷を整理し，今日の神戸南京町が都市構造再編の過程で新たに意識的に再構築されて，商品やサービスが展開されたことを指摘した研究 [13]や，現在の神戸南京町のまちづくりが，南京町商店街振興組合の華僑と行政や日本人企業及び団体といった日本人との相互扶助によって成り立っていることを指摘した研究 [14]がある。これらはいずれも南京町内部の現況及びこれまでの変遷について示すにとどまっている。

一方，神戸の華僑社会に注目した研究もみられる。例えば，華僑の居住地は南京町ではなく，中山手通三丁目や北野町，山本通に

*筑波大学人間総合科学研究科　**筑波大学芸術系

現在も華僑が住んでいることを指摘している研究[15]，関帝廟や中華義荘では今日も華僑の伝統祭祀が行われていることを指摘する研究[16]，神戸中華同文学校において華僑の子どもに対する教育が行われている指摘[17]などがある。

このように，中国風のイメージを利用したまちづくりにかかる研究は，日本以外の事例を含め，中国イメージ付与のあり方や，形成過程，居住する中国人の動向に注目しているものと思われる。

一方で，既往研究でもすでに一部指摘されているように，神戸南京町は，都市構造再編の過程で再構築されており，行政による南京町周辺地区の観光整備が南京町の観光整備にも少なからず影響を与えていると考えられるが，神戸南京町と，その周辺に位置する旧居留地及びメリケンパークなどとの関係について，具体的にどのように関係したのか分析した研究はない。また中国風イメージを付与された南京町と，関帝廟及び中華学校が所在する華僑の居住地との関係についての研究も見られない。

以上のように，神戸の華僑社会と南京町それぞれの研究はあるものの，それらの関係をみた研究はない。よって本研究では，日本の開国以降の神戸における華僑の居住地及び南京町とその周辺地区の整備の関係を空間的特性から把握し，現在の「神戸南京町」に至る神戸華僑の関わり方を明らかにすることを目的とする。

（2）研究方法

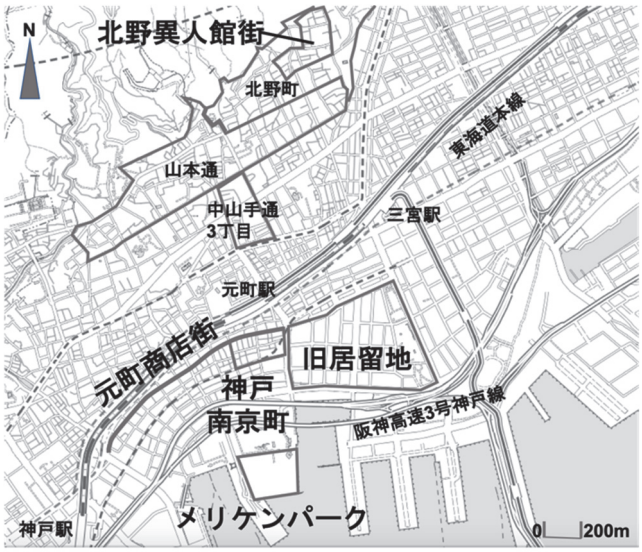
本研究では，神戸南京町および周辺地区の整備の変遷を，中国様式の建築物や牌楼の整備，祭や行事などのイベント開催による観光地化が始まった 1977 年以前の神戸華僑の居住範囲及び現在の神戸南京町に該当する地区の状況と，以降の居住範囲と神戸南京町及び周辺の整備状況を把握した。

また，今日の神戸南京町地区の範囲とその周辺の中国人関連の建物利用，牌楼および廟の分布及び立地環境を把握した。具体的には，戦前の神戸南京町とその近隣に関しては，明治前期・昭和前期 神戸都市地図の三宮（1937）の地図及び市民のグラフこうべ（No.221 南京町）の「昭和 10 年前後南京町中心部[18]」から把握した。神戸南京町成立以前の 1970 年代の神戸南京町とその近隣に関しては，1970 年の神戸市生田区のゼンリン住宅地図から把握した。神戸南京町成立後の神戸南京町とその近隣に関しては，1990 年の神戸市中央区（西部）のゼンリン住宅地図から把握した。現在の神戸南京町に関しては，2019 年の神戸市中央区のゼンリン住宅地図から把握した。また，新修神戸市史,南京町及び神戸華僑に関する文献[19]などから，神戸南京町地区及びその周辺の神戸華僑と関連する地区，神戸華僑に関連する祭・行事を把握した。中華会館，中華学校などの中国人と関連する建物を「中国関連事業所」とし，前述の地図資料から分布を把握した。華僑の居住範囲に関しては，文献[20]に基づいて，前述した住宅地図をもとに中国人名が集中している場所を確認した。

2．神戸南京町および周辺地区の概要

「神戸南京町」は神戸市の中でも有数の一大観光地であり，2020 年現在，神戸南京町地区には 3 基の牌楼（中国式門）と一対の中国獅子像が建てられている。また，中国の旧暦に則った旧正月には「南京町春節祭」が行われ，周辺地区の商業施設等も巻き込んで，獅子舞や龍舞が行われている。「南京町春節祭」は，1997 年に神戸市の地域無形民俗文化財に認定されている。その他，町の中央部には，中国風東屋や中国風電話ボックスが南京町広場にあり，公衆便所として中国風建築物である臥龍殿がある。南京町景観計画区域内では，通りに中国風の名称が付与されている。南京町の北側に元町商店街，東側に旧居留地，北側に北野異人館街，南側にメリケンパークが位置している（図－1）。

3．「神戸南京町」成立以前（1976 年以前）



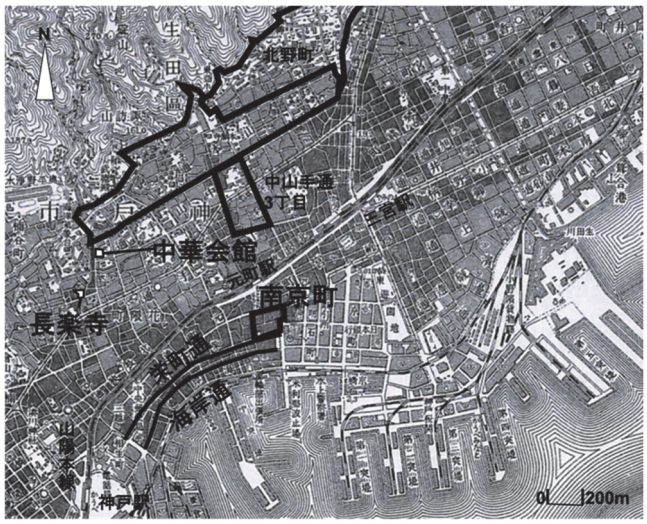
図－1　神戸南京町及び周辺地区の観光地[21]

（1）戦前の神戸南京町

1867 年，徳川幕府は諸外国との取り決めに基づいて，居留地を本来の開港予定地であった兵庫港から神戸村に変更し，その建設を開始した。居留地の造成は幕府の崩壊により遅延し，完成及び競売は 1868 年 9 月に明治政府により行われた。この遅延により，明治政府は生田川以西，宇治川以東，北側の山麓までの地区を雑居地とし，外国人の居住を許可した[22]。

南京町の形成当初は華僑の商店が南京町全体の 7 割以上を占めていたが，神戸港や華僑と関係のある日本人が南京町に店を構えるようになると，中国人事業所は全体の 3 分の 1 程度となり，残りは日本人の事業所であった。1926 年，華僑と日本人商人を含む南京町市場組合が結成され，日本人と華僑が協力して南京町を形成するようになった。客は日本人中国人共におり，神戸南京町は戦前，華僑だけでなく神戸市民の日常生活を支える市場であった[23]（図－2）。

日中戦争で華僑人口は減少し，1945 年の神戸大空襲により神戸の中心部は壊滅的な被害を受け，南京町も焦土と化した[25]。戦後の南京町はヤミ市として再出発し，トタンやバラックの店が並んだ。1950 年，朝鮮戦争が勃発し，南京町は朝鮮特需で再び賑わいを見せた[26]。この時期に中華料理店も 7 軒ほどに増え，戦前の面影を取り戻しつつあった[25]。一方でこの時期，進駐軍兵士らを相



図－2　神戸南京町周辺地区（1935 年）[24]

手とする「外人バー」が集積し，歓楽街としての側面が強まった[18]。この状況は高度成長期も続き，外国人船員やベトナム戦争時の帰休兵らが多く出入りした[25]。南京町は治安の悪い状況が続き，華僑は南京町から離れていった結果，一時は南京町に中華料理店が一軒のみとなる[27]など，華僑と南京町の関係は希薄となった。

その後1974年，神戸港が全面返還され，石油危機以降の海運不況や円高により，南京町にあった「外人バー」は次々と閉店し，南京町は衰退した[25]。

（2）神戸華僑の居住範囲

1871年に日清修好条規が締結されるまで，華僑は非条約国人であったため居留地内に住むことができず，多くの華僑が，居留地西側の雑居地であった栄町や元町付近とともに海岸通にも集住した。開港当初の華僑は居留地の外国人に雇用されたものが多く，居留地に近い海岸通は職住に好都合な土地であった。その後も清国領事館が海岸通に設置され，海岸通近辺に居住するものが増加した。海岸通や乙中通，栄町通には中国人の海運会社，貿易会社などの事務所が集中し，南京町は商業集積地として栄えた[28]。

神戸華僑は，中山手通3丁目にも多く住んでいた。この地区は，広東省から来た華僑が多く居住していたことから「広東村」と呼ばれていた。今でもこの界隈では広東料理などの中華料理店が多く所在している[29]。

また，北野町，山本通にも多くの華僑が住んでいた[28]。現在も異人館の建物が，中華料理店や台湾系の華僑総会として利用されている[27]。北野では戦前から真珠の加工業が盛んで，台湾系の人々が多く携わっていた[29]。

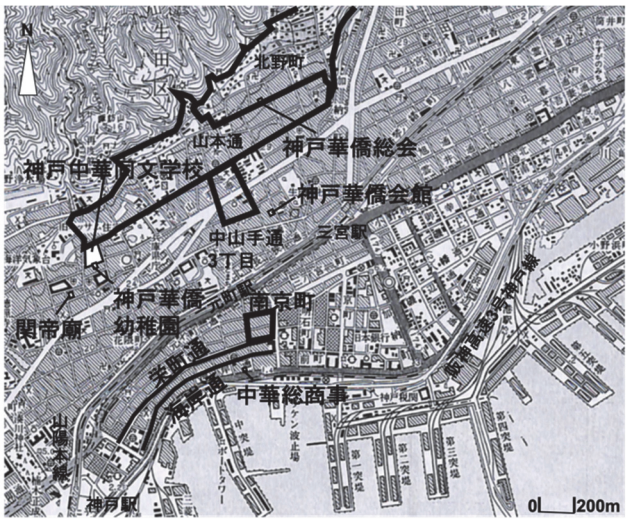
1970年の神戸市生田区のゼンリン住宅地図を確認すると，中山手通3丁目で多くの中国人が集住しており，北野町，山本通でも中国人名を確認することができた。

このことから，神戸華僑は，中山手通3丁目，北野町，山本通と，南京町周辺に多く居住しており，南京町は形成された当初は居住していた華僑がいたものの，日清修好条規批准により華僑の居住範囲が拡大すると，華僑にとっての居住区ではなく商業地区であったことが考えられる（図－3）。

（3）建築物およびイベント

復興整備前の南京町には，中国風の建物や店は数件ほどしかなく異国情緒のない町であった[31]。

1888年4月，呉錦堂をはじめ神戸在住の有力華僑らにより，中華義荘（中国人墓地）のあった現在の中山手通7丁目に関帝廟が建立された[32]。関帝廟が建立されるまで，華僑の葬儀は中華義荘



図－3　神戸南京町周辺地区（1970年）[30]

写真－1　神戸関帝廟（筆者撮影）

内の礼堂で行われていた[33]。元は河内国布施村(現在の東大阪市)にあった黄檗宗の末寺で廃寺となっていた長楽寺を，当地に移して復興したものである[34]。神戸市民からは「南京寺」と呼ばれていた[33]。1945年の神戸大空襲により関帝廟は全焼したが，1947年に長野市善光寺から釈仁光師を迎え，台湾出身の有志が160坪の土地を購入して用地を提供し，また多くの華僑の寄付により再建計画が進められ，1948年，総工費一千万円をかけて関帝廟本堂が再建された[32]。神戸の華僑にとって関帝廟は，日常生活に溶け込んだ信仰の対象であり，精神的な支柱である[32]。新暦の正月には，神戸華僑は関帝廟に参拝し，盆には先祖の霊に感謝を捧げる[32]。「明治前期・昭和前期 神戸都市地図（1937）」の三宮の地図には，同じ場所に長楽寺と記載されていることが確認できる（図－2）。

神戸の関帝廟では，媽祖祭・関帝祭・普度など華僑の伝統行事が行われている。この中でも普度は，華僑の最大の祭祀として，毎年旧暦7月15日から3日間にわたり開催され，神戸の華僑だけでなく，全国各地の華僑が参拝に訪れる。神戸の普度は1934年に始められ，一回目は神戸華僑の墓地である中華義荘（中山手通7丁目）で，二回目は1938年に関帝廟で簡単な儀礼が行われた。その後，戦争により普度は中止となり，終戦後，1947年に関帝廟にて復興された[35]。

神戸に定住する華僑が増加するにつれ，子供たちに母国中国の伝統文化や言語を習得させるための学校が必要と考えられ，1899年9月中山手通3丁目に木造瓦葺二階建ての校舎が建設され，神戸中華同文学校が開校した[36]。神戸大空襲により焼失したが，1959年に華僑の集住地区である中山手通6丁目にある中華会館の跡地に移転し再建された[36]。中華同文学校の講堂は，神戸華僑の集まる場所として，中華会館に代わり大いに活用された[37]。

これら神戸の関帝廟および中華学校は，現在の神戸南京町である華僑の商業地区内には立地しておらず，このことからも，1976年以前，戦争を挟んで華僑たちは現在の神戸南京町ではなく，その北西に位置する中山手通に多く集住していたといえる。

4．「神戸南京町」の成立（1977年以降）

（1）神戸南京町の復興計画と周辺地区の整備

南京町の衰退に危機感を抱いた南京町の事業者らは1976年，「南京町を考える会」を発足させ，南京町地区の復興整備に関する陳情書を神戸市に提出した[31]。この陳情に対し，神戸市は「中国的な景観や意匠に富んだまちづくりをバックアップする」という方針を決定する[25]。1977年，神戸市の援助を受けるため，南京町商店街振興組合が設立された[25]。設立メンバー64名のうち，ほ

とんどが日本人だった[31]。さらに地元住民・市職員・コンサルタントなどからなる「まちづくり協議会」が組織され，1981年に南京町復興環境整備事業実施計画が策定された[25]。神戸市は1970年代末，異人館を中心とした北野地区の観光地整備を開始し，南京町の再開発もこうした都市構造の再編に向けて検討されるようになった[38]。1981年当時の南京町商店街振興組合理事長の藤原正治は，南京町の目標として，①町の中華風外観の統一，②北野異人館と結びつけ人の流れを呼び込むことを挙げている[39]。

南京町商店街振興組合にある南京町商店街環境整備事業協議会レポートによると，街路整備，街路灯，広場の整備は神戸市が主体となって行い，あづまやと楼門の整備は地元が主体となって行うと記載されていた（第14，15回レポート）。また，楼門，あづまやは商店街の独自事業であり，神戸市から2000万円の助成を受けているが，南京町のシンボルとなるので寄付金を多く集める努力をしなければならないと記載されていた（第16～22回レポート）。整備事業を推進する役員として，日本人と華僑が名を連ねていた（第28回レポート）。復興計画の協議会には華僑も参画し，楼門やあづまやの整備にも関わっていたと考えられる。

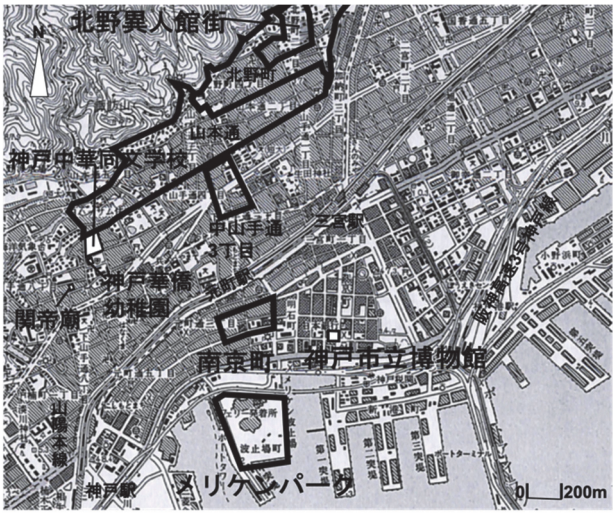
この時期，南京町東側に隣接する旧居留地では，1970年代後半のレトロブームにより，地区内に多く残っていた近代建築物や歴史的雰囲気が見直され，そこにブティックや飲食店が新しく開業し，商業集積地となった。1982年には，元横浜正金銀行の建物が改修増築され，神戸市立博物館が開館した。1983年，旧居留地地区が都市景観形成地域に指定された。その後，大正から昭和初期に建設された建築物が，ファッション関係の店舗やカフェ，レストランとして利用され，観光の対象となった[40]。

南京町南側のメリケン波止場および中突堤の神戸港方面では，1970年代前半から神戸港の物流の中心が南東方面へ移行した。また，人々の交通手段が船から自動車あるいは航空機に変化すると，以前の活気が影を潜め，施設の老朽化も進んでいた[41]。このような状況に対し，神戸市により検討委員会がもたれ，1978年7月に「中突堤地区再開発構想」がまとめられた[42]。この構想をもとに再開発事業が具体化されると，1980年から施設整備が開始され1987年4月にメリケンパークがオープンした[43]。

このように，南京町復興環境整備事業実施計画が策定された1980年代の同時期に南京町の整備と並行して，旧外国人居留地やメリケンパークにおいても神戸市による観光整備が行われ，神戸の，都市観光地としての色合いが強まった。南京町地区も，観光を軸とした都心の歩行者ネットワークの重要な拠点として神戸市に認識されるようになった。神戸市は，神戸のイメージを担う重要な地域として南京町を位置づけ，1990年に都市景観形成地域に指定した。その基本方針は，中国系業種の集積を活かして異国情緒豊かな街並みを演出していくことであった。具体的な方策として，「南京町地区景観ガイドライン」が定められ，地区における新築，増改築については，屋根・庇，外壁，一階の用途・形態，屋外広告物，その他について設計上の誘導が進められた。これにより，チャイナタウンとしての南京町のイメージは確立され，観光地として発展した[44]。

南京町の範囲は，1980年代までは現在の南京町広場から西側の通りは南京町と呼ばれておらず[45]，南京町広場から東側半分が南京町として認識されていた[46]。1981年に策定された「南京町復興環境整備事業実施計画」でも，南京町の復興計画の主要道路の範囲は，東側半分のT字路のみであった[46]。よって，現在の南京町広場から西側半分は華僑の事業所がほとんど無かったと考えられるが，1987年の南京町春節祭を機に西側半分も整備が拡張され，1990年9月の景観形成指定の際，西側も範囲に含まれた[46]。これにより，現在の神戸南京町の範囲となった（図－4）。

1990年の神戸市都市景観審議会の「答申書 －南京町地区の景観形成について－」によれば，南京町地区の将来像として，周辺商業地と有機的連携を図りながら，活気あふれる都心商業地を形成すること，イベントや食文化をはじめとする外国文化との交流が行われる場の形成，元町商店街や栄町通りとは趣の異なる個性的な商業地の形成を挙げている。また基本方針として，中国風建物に代表される異国情緒豊かな街並みの形成を図るとしていた。



図－4　神戸南京町周辺地区（1990年）[47]

（2）建築物

南京町復興環境整備事業実施計画に基づき，翌年の1982年から具体的な景観整備事業が始まった。景観整備のポイントは，牌楼，街路，広場の3点であった[48]。1982年，神戸港方面からの入口を想定して，栄町通に面した町の南側入口に「南楼門」が建設された。1983年，南京町内の街路が石畳の歩道に整備され，町の中央に南京町広場が完成し，中国風のあづまやが設置された。続いて1985年，旧居留地方面からの入口を想定して，メリケンロードに面した町の東側入口に「長安門」が建設された。

1987年，南京町広場に中国風電話ボックスが設置された。続いて1988年，元町商店街アーケードと繋がっている街の北側入口に「中国獅子像」が設置され，南京町と元町商店街を結びつける観光整備が行われた。1989年には，南京町広場に十二支石像が設置された。

写真－2　長安門（筆者撮影）

図―5　神戸南京町地区（2019 年）[49]

2005 年，「西安門」が震災復興 10 周年のシンボルとして新しく建て替えられ，2006 年，「南楼門」のライトアップ完成に伴い，新しく「海栄門」に名称変更された（図―5）。

（3）イベント

神戸南京町では，ハード面だけでなくソフト面の強化も重視され，1987 年に第一回南京町春節祭が開催された。日本の中華街における最初の大体的な春節の催しである，横浜中華街の「第一回春節」が前年の 1986 年に開催されており，横浜中華街の影響を受けていることも示唆される。神戸の春節祭では，神戸華僑総会舞獅隊による獅子舞とともに，南京町商店街振興組合の有志二十数名（日本人と華僑の混成）による龍舞が披露された[48]。

1995 年に発生した阪神・淡路大震災により，南京町も被害を受けるが，環境整備後であったため建物は比較的丈夫であり，ほとんどは一部損壊で済み，甚大な被害にはならなかった[50]。1996 年には，半壊していた長安門が再建された。

1995 年に阪神淡路大震災の復興イベントとして開始した「神戸ルミナリエ」の協賛イベントとして，1996 年から「ランターンフェア」が開始した。中国風のランタンを南京町内の主要通りに設置するイベントである。

また 1998 年からグルメイベント（1988 年から開催。1997 年までは「好吃広場」というイベントとして開催）を前身とする「中秋節」が開催されている。「中秋節」では，参加型の催しや南京町オリジナルの月餅が販売され，2019 年まで，毎年開催されてきた。

2007～2016 年には，神戸空港の開港 1 周年を祝いスタートした「興降春風祭」が開催されていた。

これらのイベントではいずれも，獅子舞・龍舞・太極拳・舞踊の催しが行われている。獅子舞を南京町のイベントに取り入れるようになったのは，1987 年の春節祭からである。獅子舞や龍舞は神戸華僑が昔から受け継いだ伝統文化に見えるが，実際は，南京町の観光地化に伴う春節祭の創始を契機として，新たに「見せるための文化」として創られたイベントである[51]。神戸の獅子舞は戦前，華僑により行事などで舞われていたという[52]。戦後は香港から来た中国人船員とともに，娯楽として行われていた。

1967 年のコンテナ船就航以降は香港からの船員が途絶え，獅子舞も廃れた[47]。神戸において，獅子舞が復興した理由として，若い世代の華僑の中国人アイデンティティの希薄を危惧した老華僑によって，1979 年の神戸華僑総会理事会で獅子舞再開の話が持ち上がり，可決されたからである[52]。

2020 年には，神戸南京町に隣接する北野地区で「北野春節祭」が開催され，中国関連のイベントが一層広がりを見せている。しかし，前述した関帝廟で行われている華僑の伝統行事は，神戸南京町では開催されていない。

図―6　中国関連イベント分布（2020 年）[53]

このように，神戸南京町では獅子舞等の中国文化を発信するイベントを多く開催することで，南京町の中国文化の発信地としてのイメージ強化に努めている。また，町内部だけでなく，周辺地域でも南京町関連イベントを開催し，周辺地域を巻き込んで中国文化を利用した観光事業を行っている（図―6）。

5．まとめ

神戸開港以来，華僑は居留地西側の雑居地に南京町を形成した。華僑の居住範囲の制限がなくなると，その居住範囲は南京町から外へ拡大し，戦前，南京町は中国に特化しない神戸市の一商店街として機能していた。戦後，治安が悪くなり，物流や公共交通の変化に伴って神戸南京町は衰退していった。また華僑は，南京町付近から，北東かつ南京町とは隣接もしていない，関帝廟や中華学校の近隣である中山手通 3 丁目，北野町，山本通など広範囲に移住していた。これにより，華僑たちが日本人社会に受け入れられたことが示唆される。

1970 年代後半に都市観光地化を目指した神戸市は，周辺の旧外国人居留地やメリケンパークとともに，地区の個性を際立たせる事業を展開したといえる。外国人居留地・メリケンパーク・元町商店街に挟まれている神戸南京町では，その結節点に牌楼などが整備され，中国イメージを特徴とした街を成立させていった。さらに，横浜中華街で春節が開催された翌年に春節祭を開催し，神戸南京町における中国イメージの強化が進められたといえる。それ以降も，華僑の伝統行事とは交わらないまま，南京町関連イベントが次々と開催され，神戸南京町は日本人と，日本人社会に受け入れられたと考えられる華僑によって，新しく創られた中国文化を演出する町になったといえる。

神戸では，中国文化を演出する神戸南京町と，中山手通を中心とする華僑の居住区が，それぞれ建築物及びイベントにおいて，南京町では牌楼の設置や春節のイベントなど観光客向けの整備がなされており，一方で華僑の居住区である中山手通りでは関帝廟や中華学校が所在し，華僑のための祭祀が行われていることから，異なる様相を呈しており，いわば中国文化の二重構造をみることができる。これは，そもそも神戸市という都市の歴史と関連したものであり，居住者としての華僑を受け入れながら，そのイメージを利用して都市観光地を目指した神戸市の特徴と整理することもできる。今後は，中山手通や北野においては，居住者としての華

僑の文化風習を尊重する一方，南京町では，日本人・華僑関係なく神戸市民が運営に関わり続けられるようにし，その違いを認識した地域づくりが求められよう。

謝辞:本研究はJSPS科研費16K08125の助成を受けたものです。

補注及び引用文献

1) 末廣拓登・伊藤弘（2020）:「横浜中華街」の形成過程とその要因に関する研究，ランドスケープ研究83(5)，685-690
2) 張松・西村幸夫（1997）:上海外灘歴史地区の景観保全計画に関する研究，日本建築学会計画系論文集 62(496), 125-130
3) 宮脇勝・唐圻亮（2014）:中国上海市における外国人居留地の歴史的景観キャラクタライゼーションに関する研究 -イギリス人居留地を対象として-，都市計画論文集 49(1)，25-32
4) 坪井朔太郎・谷口智雅・宮岡邦任・朱元曽（2004）:中国上海市の外灘地区におけるウォーターフロント景観と観光行動，水資源・環境研究(17), 15-22
5) 和田修一（2012）:アメリカへの中国移民とチャイナタウンの発展:その歴史と比較・分類枠組み，平成国際大学研究所論集(12), 63-107
6) 山下清海（2017）:サンフランシスコにおけるチャイナタウンの形成と変容:ゴールドラッシュからニューチャイナタウンの形成まで，筑波大学人文地理学研究(37)，1-18
7) 山下清海（2019）:世界のチャイナタウンの形成と変容 フィールドワーク調査から華人社会を探求する:明石書店，15-312
8) 余南・菅原洋一（2008）:近現代日本における中国都市イメージの形成と定着に関する研究～神戸南京町を事例として，日本建築学会東海支部研究報告集(46)，761-764
9) 辺清音（2018）:再開発されたチャイナタウンにおける店舗の変容ー神戸南京町の事例からー，総研大文化科学研究 第14号，87-107
10) ただし，神戸南京町の店舗の分類により多国籍な街が形成されていることを指摘した研究（高橋正明・于亜（1996）:神戸南京町の形成と変容，大手前女子大学論集(30)，105-128）もあり，注意を要する。
11) 高橋晋一（2015）:南京町の歴史:南京町と神戸華僑:松籟社，13-93
12) 呉宏明（2015）:南京町の隣町:南京町と神戸華僑:松籟社，168-171
13) 大橋健一（2000）:「神戸南京町」の再構築と観光，立教大学観光学部紀要(2)，36-40
14) 宋晨陽（2015）:チャイナタウンとしての南京町の戦略:南京町商店街振興組合に注目して，海港都市研究(10)，65-82
15) 岡野翔太（2015）:中華料理業から見る華僑:南京町と神戸華僑:松籟社，221-228
16) 王維（2015）:華僑の伝統文化:南京町と神戸華僑:松籟社，229-237
17) 張玉玲（2015）:教育とエスニシティ:南京町と神戸華僑:松籟社，239-246
18) 神戸市広報課編（1991）:市民のグラフこうべ（No.221 南京町），16
19) 南京町及び神戸華僑に関する文献は，「中華会館（2013）:落地生根 増訂版 神戸華僑と神阪中華会館の百年:研文出版」「呉宏明・高橋晋一（2015）:南京町と神戸華僑:松籟社」である。
20) 例えば，文献に華僑が中山手3丁目に多く居住していたと書かれていた場合，ゼンリン住宅地図にてそこに中国人名があるかを確認し，その範囲を図示した。
21) 国土地理院ホームページの地理院地図Vectorの白地図を引用した。
22) 新修神戸市史編集委員会（2005）:新修神戸市史 行政編3（都市の整備），3
23) 高橋晋一（2015）:南京町の歴史:南京町と神戸華僑:松籟社，20
24) 地理調査所による1935年の神戸首部の25000分の1の地図を使用した。
25) 新修神戸市史編集委員会（2014）:新修神戸市史 産業経済編 4（総論），742
26) 高橋晋一（2015）:南京町の歴史:南京町と神戸華僑:松籟社，36
27) 高橋晋一（2015）:南京町の歴史:南京町と神戸華僑:松籟社，43
28) 呉宏明（2015）:南京町の隣町:南京町と神戸華僑:松籟社，170
29) 岡野翔太（2015）:中華料理業から見る華僑:南京町と神戸華僑:松籟社，224
30) 国土地理院による1971年の神戸首部の25000分の1の地図を使用した。
31) 高橋晋一（2015）:南京町の歴史:南京町と神戸華僑:松籟社，49
32) 新修神戸市史編集委員会（2014）:新修神戸市史 産業経済編 4（総論），459
33) 中華会館（2013）:落地生根 増訂版 神戸華僑と神阪中華会館の百年:研文出版，321
34) 中華会館（2013）:落地生根 増訂版 神戸華僑と神阪中華会館の百年:研文出版，335
35) 王維（2015）:華僑の伝統文化:南京町と神戸華僑:松籟社，235
36) 新修神戸市史編集委員会（2014）:新修神戸市史 産業経済編 4（総論），461
37) 中華会館（2013）:落地生根 増訂版 神戸華僑と神阪中華会館の百年:研文出版，245
38) 高橋晋一（2015）:南京町の歴史:南京町と神戸華僑:松籟社，48
39) 神戸新聞社（1987）:素顔の華僑ー逆境に耐える力:人文書院，38
40) 新修神戸市史編集委員会（2014）:新修神戸市史 産業経済編 4（総論），753
41) 新修神戸市史編集委員会（2014）:新修神戸市史 産業経済編 4（総論），747
42) 新修神戸市史編集委員会（2014）:新修神戸市史 産業経済編 4（総論），748
43) 新修神戸市史編集委員会（2014）:新修神戸市史 産業経済編 4（総論）,749
44) 新修神戸市史編集委員会（2014）:新修神戸市史 産業経済編 4（総論），743
45) 高橋晋一（2015）:南京町の歴史:南京町と神戸華僑:松籟社，21
46) 高橋晋一（2015）:南京町の歴史:南京町と神戸華僑:松籟社，63
47) 国土地理院による1990年の神戸首部の25000分の1の地図を使用した。
48) 高橋晋一（2015）:南京町の歴史:南京町と神戸華僑:松籟社，54-55
49) 国土地理院ホームページの地理院地図Vectorの白地図を引用した。
50) 高橋晋一（2015）:南京町の歴史:南京町と神戸華僑:松籟社，65
51) 高橋晋一（2015）:南京町の歴史:南京町と神戸華僑:松籟社，55
52) 高橋晋一（2015）:獅子舞:南京町と神戸華僑:松籟社，150
53) 国土地理院ホームページの地理院地図Vectorの白地図を引用した。

(2020.9.26受付，2021.3.30受理)